

京ノ中遺跡第2次発掘調査 遺跡見学会資料

～平安時代の集落（ムラ）と古代から中世の屋敷跡～

仙台市教育委員会文化財課 平成31年2月16日（土）

調査の概要

- 遺跡名** 京ノ中遺跡（第2次）
- 所在地** 仙台市太白区富田字京ノ中83地内
- 調査原因** 医療施設建設工事に伴う緊急発掘調査
- 調査面積** 2095㎡
- 調査主体** 仙台市教育委員会
担当：文化財課調査指導係
(株)シン技術コンサル
- 調査期間** 平成30年10月11日
～平成31年3月22日（予定）

一般財団法人 広南会により計画されている医療施設建設工事に伴い、現在、仙台市富沢駅西土地地区画整理事業地内にある京ノ中遺跡で第2次の発掘調査を実施しています。今回の調査では、古代～中世にかけて平野部で営まれた集落の様相が見えてきました。



調査区位置図

富沢駅西土地地区画整理事業地内の平安時代の集落について

これまで、区画整理事業地内では京ノ中遺跡の他に、富沢館跡・川前遺跡・鍛冶屋敷前遺跡・鍛冶屋敷A遺跡・鍛冶屋敷B遺跡・宮崎遺跡・六本松遺跡・川前浦遺跡の計9遺跡を対象に発掘調査が行われています。その中でも、鍛冶屋敷前遺跡・鍛冶屋敷A遺跡・鍛冶屋敷B遺跡・京ノ中遺跡第1次調査では、平安時代の竪穴住居跡が約30軒確認されています。

これまでの調査成果として平安時代の集落の特徴としては、竪穴住居跡が散在しており、2軒以上の住居跡が重なり合うものが非常に少ない事があげられます。その傾向は、事業地内北側の鍛冶屋敷A遺跡で顕著にみられ、逆に南側の鍛冶屋敷前遺跡では竪穴住居跡同士は重なり合わなくても、鍛冶関連遺構が造られるなど遺構の密度が濃くなってきます。今回発掘調査を行った京ノ中遺跡は集落の南側に位置しています。第1次調査では竪穴住居跡は散在していましたが、第2次調査では同じ場所で、新しい住居の方が古い住居より規模を小さくして重なり合っています。

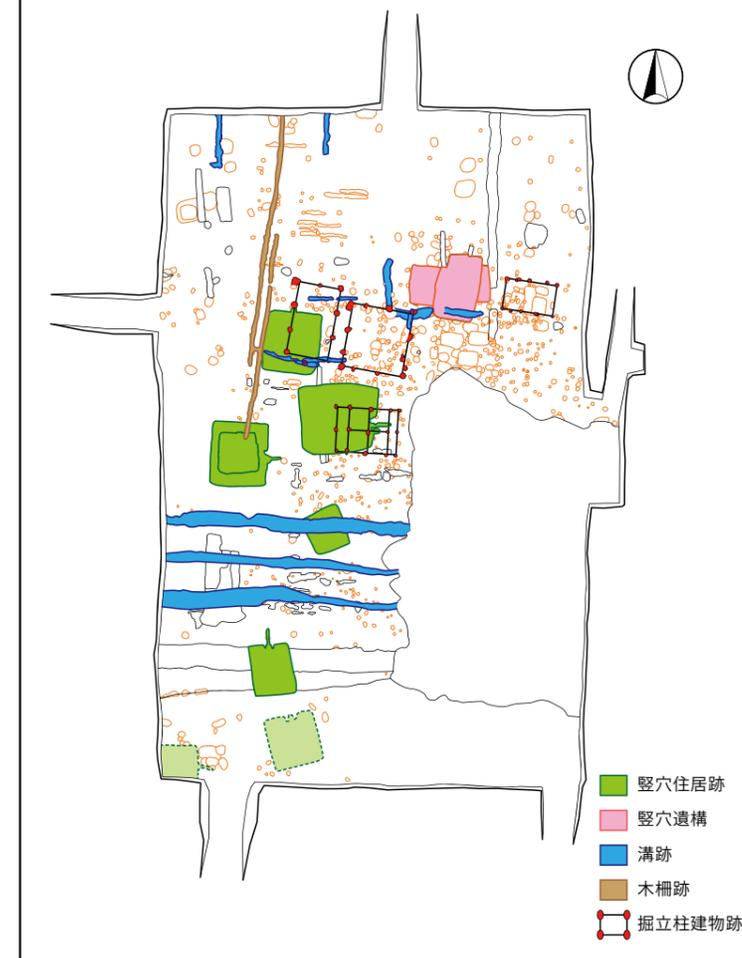


京ノ中遺跡第1次 2号竪穴住居跡



京ノ中遺跡第1次 1号・2号竪穴住居跡

京ノ中遺跡第2次発掘調査遺構配置図



調査成果について

京ノ中遺跡は、地下鉄富沢駅の南西約1.5kmに位置する平安時代から中世にかけての遺跡です。平成26年度の第1次調査では、今回の調査区北東側に隣接する道路部分の発掘を行い、平安時代の竪穴住居跡2軒のほか、土坑・溝跡・ピット（柱穴）が確認されています。今回の調査では、平安時代の竪穴住居跡と土坑のほか、中世の遺構としては木柵跡・溝跡・掘立柱建物跡・竪穴遺構・土坑を確認しています。



● 竪穴遺構

調査区北東側に位置し、3基が重なり合っています。本遺構の上には周辺に数多く確認できる柱穴が重なり合っており、今回の調査の中で最も新しい遺構と言えます。性格は不明ですが、床面からは火を受けて赤くなった炉跡が見つかりました。



● 掘立柱建物跡

調査区中央に数多く確認できる柱穴群の中から、掘立柱建物跡が数棟組むことがわかりました。柱穴群の周囲には木柵跡と溝跡があり、その外側では柱穴の数が極端に少なくなることから、掘立柱建物跡の確認できるこの一画は木柵で区画されていた可能性が考えられます。



● 竪穴住居跡

調査区中央から南西側にかけて、9軒確認されています。ほとんどは単独で見つかりっていますが、中央の東側にカマドの煙道を持つ2軒では、内側に規模を小さくした別の住居跡に造り替わっています。

仙台市富沢駅西土地区画整理事業地内の遺跡

地下鉄南北線南の終点富沢駅西側の田園地帯に計画された、「仙台市富沢駅西土地区画整理事業」に伴う発掘調査は、平成 25 年から 28 年まで、事業地内にある 9 遺跡を対象に行われました。

事業地内東側にある川前遺跡や富沢館跡南東部からは、約 3000 年前の縄文時代の竪穴住居跡が見つかり、多数の縄文土器とともに土偶や岩偶、石刀などの特殊な遺物が見つかりました。

また、事業地内西側にある鍛冶屋敷前遺跡や鍛冶屋敷 A 遺跡・鍛冶屋敷 B 遺跡からは、約 1000 年前の平安時代の竪穴住居跡や鍛冶作業場跡が見つっています。



川前遺跡

～土偶・岩偶・岩版・石刀

不思議な縄文の世界～

川前遺跡では、約 3000 年前の縄文時代後期の竪穴住居跡とともに数多くの土器や石器等が見つかりました。その中には、煮炊きに使われる土器や狩りに使われる石器以外に、土偶・岩偶・岩版・石刀などの特殊な遺物もあります。狭い範囲の調査でしたが、見つかった 3 軒の竪穴住居跡は重なりあっていました。大きさは、直径 3～3.5m 位の比較的小型の住居跡で、円形または楕円形の形をしていました。

◎ 特殊な道具：土偶・岩偶・岩版・石刀

食料を採取や狩りに頼っていた縄文人にとって、土器や石器は日常的な生活で使われる道具であるのに対して、主に人の形を模して造られる土偶や岩偶、石の表面に模様が刻まれた岩版、形が刀に似ていることからつけられた石刀等は実用性のない、非日常的な道具と言えます。これらの遺物は、縄文人が行った自然をつかさどる神や精霊に対する祀りごとや儀式の際に使われた特殊な道具だったのです。



鍛冶屋敷 A 遺跡

～砥石に刻まれた文字の意味は……？～

9 世紀頃の竪穴住居跡から、文字が刻まれた砥石（「刻書砥石」）が出土しました。文字が刻まれた砥石の同じ時期の出土例は、群馬県内に 2 例と千葉県に 1 例あるだけで、とても貴重なものです。

刻書砥石には、4 面のうち 3 面に文字が刻まれています。最も多く文字が残る面以外の 2 面は刻書がきわめて浅いことから、文字を刻書した後に、再び砥石として使用されたと考えられます。

◎ 刻まれた文字の意味は

I 面には、平安時代に、下級身分の者が役所に願い出る際に使われた文書の様式をふまえた書き方がされています。二行目の「合」の下には、申請する稲の数量が記載されていたと考えられます。II 面にある「大田部」は、「ウジ名」で集団の呼び名のようなものと考えられます。III 面にある「上野」は、「上野国」（現在の群馬県）を指す地名を意味している可能性もあります。

砥石には、役所に稲を申請する内容の文字が刻まれていましたが、なぜ砥石にこのような刻書がなされたのかは分かりません。

※国立歴史民俗博物館

三上喜孝教授からのご教示によります。



富沢館跡

～巨大な堀に幾重にも囲まれた中世最大級の城館跡～

富沢館跡は、仙台平野で確認されている中世の城館のなかでも、保存状態の良いことで知られていました。区画整理前の富沢館跡の中心部は宅地や畑として利用され、その周囲を水田が取り囲んでいました。明治時代の地籍図や古い航空写真で水田の形状を観察すると、西辺や南辺では、細長い水田が直線状に連続する所や蛇行する所、東辺では直角に曲がる所などが読み取れ、これらは二重から三重に巡らされた堀跡の形状を反映したものとされます。

中心部に現存していた土塁は、富沢館跡に関する遺構で唯一目にする事が出来るもので、地域の歴史を伝える貴重な遺構であることから、土塁を含む館跡の中心部を公園として保存しています。



富沢館跡中心部に残る土塁（北西上空から）